
蒙古斑 by akuma

akuma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒙古斑 by akuma

【Nコード】

N4755L

【作者名】

akuma

【あらすじ】

「おっちゃんも仕事探してんの」
ハローワークで知り合った女の子。
彼女の21年の人生を聞かされた。

まだ6月というのに、真夏のような日差しが矢のように差す。それまでの習慣でネクタイを締めて出かけたのは失敗だった。

今はもう、誰に気兼ねする事も無いのだから、クールビズに乗っかても良かったのに、と後悔していた。

エアコンの効いた電車を降り、駅の改札を出た頃には額や首の周りに汗が張り付いていた。

その娘は、古い石造りの建物の階段に座り込み、熱心に何かを見ている。

まだ十代か、ジーンズのショートパンツにTシャツ、派手な上着に、ほぼ金髪の髪の毛を頭の天辺で巻いていた。今時はよく見かけるかっこうだ。

自分の娘も同じような格好をよくしている事を思い出し、そのまま通り過ぎて、目的のビルに辿り着いた。

「こつという時期ですから、多少条件が合わなくても応募してみた方が良いでしょう」

先週末に来た時と大して増えていない求人を見ながら、担当者は言う。

確かに、この不況下、本当に人が欲しいところは、とつくに足りているのだろう。なかなか希望どおりの職はないが、したくも無い仕事には就きたくない。

退職して三ヶ月、履歴書を送っても、面接にさえ呼んでもらえないことが多いが、曲げられないものが僕の中にくすぶっていた。

あまり期待は出来ないにしても、一応、紹介状を書いて貰い、礼

を言つてその場を離れた。

帰り道、行きに女の子が座っていた階段に座わり、ネクタイを緩め、コンビニで買ったサンドイッチにかぶりつき、ペットボトルのお茶を飲み、先程貰った求人資料を見ていた。

「おっちゃんも仕事探してんの」

後ろから声が聞こえて振り向くと、行きにこの階段に座っていた今の娘が、いつの間にか戻ってきて、

「ええ仕事あつた？　うちは全然や」

と人懐っこく喋りかけてきた。

ストローを差したスタバのコーヒーを一口吸い、

「うちは何にも資格ないし、アホやから何にもでけへん」

と自棄的な事を言う。

「まだ若いんや、今から何でも出来るやろ」

と答えると、階段を下りて来て、僕の横に座り込んだ。

「ほんでもな、高校もまともに行つてなかつたら、まともに対処してくれへんねんで、担当のおっさんもバカにするし」

「いくつや、君は」

「21」

「まだお尻が青いな、これからなんぼでも仕事はある」
「おっちゃん、うちのお尻見たんか？」
「違つて、蒙古系の民族は生まれた時、お尻に蒙古斑っていう青痣みたいなものがあるんや、大人になつたら消えるけど、それが残つてくるくらい若い、つて言う例えや」
「おっちゃん、賢いねんなあー」
「君が知らんだけや」

僕の求人票を覗き見ていた彼女が

「ええっー、こんなに貰つてんの」
「まだ、貰つてないよ」
「あつ、そうか。でも、それ位貰うつもりなんやー」
「それ位はないと、家族を食わしていかれへんからな」
「そうなんやー、おっちゃん子供おるん？」
「ああ、娘が二人な」
「そっかー、大変やなあー」
「大変は自分も一緒やろ」
「そうやな、うちも早う仕事見付けなあかんねんけどな」

そう言つて俯き、またコーヒーをすする。
濃い化粧の下は、整つた目鼻立ちで、ふつゝの化粧と格好をすれば、もつと綺麗に見えると思うに十分だった。

「今日はどんな仕事紹介してもらたんや」
「販売」
「店員か」
「うん、でも臨時や」
「臨時でも仕事があつたらええやろ」
「うちはちゃんとした仕事をしたんや」

「正社員、てことか？」

「うん」

「探したら幾らでもあるやろ」

「でもな、相談のところに行ったら、担当のおっさんがあーだこーだ言ってくるから」

「おっさんが就職する訳やない、君が仕事を探してるんやろ」

それから、彼女が語る21年の人生を延々と聞かされた。

時々、「それで、どうしたんや」とか、「それは違うやろ」という合いの手を入れると、色々な話に飛び火し、次から次へと出てくる。

小学校の時は結構勉強が出来た事、中学になって途端に成績が振るわず、行きたい高校には行けなかった事、高校を中退して、美容院の手伝いに入ったこと、義理の父親と会わず、家を出た事、コンビニの店員、イベントコンパニオン、居酒屋の店員、またつい最近まで、そこで知り合った男と暮らしていた事など、熱のこもった話が小一時間ほど続いた。

「ああ、何でこんな事まで喋ってんやろ、今逢うたばかりなのに」

「誰かに話したかったんやろ、すっきりしたか？」

「うん、さっきまでイライラして落ち込んでたけど、何か良くなったわ」

「それは良かった」

「ゴメンな、勝手に喋ってばかりおって」

「いいや、面白かったで」

「ほんま？ 何か話しやすいねんもん、おっちゃん」

「おっちゃんやなくて、おじさん。akumaでもええ」

「なんでアクマなん？」

「話せば長くなる、また今度な」

「今度な、つてまた逢えんの？」

「嫌やなかつたらな」

「嫌やないよ、もつと話したい。また来る？」

「さあー、わからんな」

「ほなら、メルアド交換しよ」

派手にデコレーションされた携帯を取り出し、僕のアドレスを訊いてメールを送ってきた。

『エリちゃんですーす

始めまして

ケイタイは

ですーす』

「うち、もういっぺん仕事見てくるわ」

彼女はそう言って立ち上がると、思いのほか背が高く、そのスラリと伸びた足がまぶしく見えた。

「ああ、そうしい。辛抱強く話しいや」

「うん、んじゃまたね、akumaさん」

「ああ、またな」

僕は、何か取り残されたように、颯爽と歩いて行く彼女の姿をしばらく見つめていた。

by akuma

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4755/>

蒙古斑 by akuma

2010年11月7日11時22分発行